

みんなが楽しくくらせるように

大阪市立南大江小学校 三年 空門ましろ

わたしがこの本をえらんだのは「じつは、わたしにしようがあるのは、あなたのせいなのです。そう言ったら、おどろきますか。」というおびが気になったからです。

作しゃは生まれつき体のきん肉がだんだん弱くなつていくびよう気で、車いすと人工こきゅうきを使っているえび原ひろみさんという方です。この本を読んだ感想は三つあります。

一つ目は「そんげんし」についてです。そんげんしとは、なおる見こみのない人が自分でしをえらぶ事です。えび原さんは、心のそこからしにたいと思つている人なんてぜつたにいないと言います。人のめいわくになるから、とえんりよしつづけることにきたいが持てなくなつていたのだ、と書いてありました。

んしかないから入れないのであつて、たて物のつくりがちやんとしていれば、車いすはしようがいではなくなる、しようがいはなくせると書かれていて、その考え方がうれしかったです。なぜならわたしの母も車いすにのつて、わたしもそう思つていたからです。

わたしは、四月に東京から大阪に引っこして来ました。理由は、母のヘルパーさんが半分い上來れなくなつてしまい東京での生活が出来なくなつたからです。三月の終わりに、小学校をてん校しないと聞いと聞いてすぐ、ショックでした。父は仕事で東京にのこつているので四月からははなれて生活しています。

この本を読んで、しようがいのある人やその家ぞくが何かをあきらめなくてはならない、という思いをするのは、わたしでさい後になつてほしいと思ひました。そして、どこに住んでいてもひつような人がひつような分サポートをうけられるようになってほしいと思ひます。

『わたしが障害者じゃなくなる日』

著 海老原 宏美
旬報社

わたしは生まれた時ほかの赤ちゃんより小さく、人工こきゅうきを使つていました。もし今も使つていたら、入れないお店や通えない学校があつたかもしれせん。それを思うととてもかなしいです。しをえらんでいるのではなく、えらばされてるのかも思ひました。もしこの本を読んでいなかつたら、しなせてあげるのもその人のため、と思つていたと思ひます。

二つ目は、手だすけについてです。えび原さんは学校ではクラスメイトがサポートしてました。友だちに毎日おねがひしないといけないのは気をつかうし、たのまれる方も大へんだつたのではと思ひました。学校でもヘルパーさんに来てもらえるようになったら安心だろうなと思ひます。

三つ目は、しようがいについてです。びよう気である事としようがいがあることはべつのことです。たとえばたて物に入れないのは、車いすだから入れないのではなく、かいだ